



時分割あるいはその場測定も、生き生きとした研究が軌道に乗り始めた。この種の研究は、PFにおける計画の始めから言われていたものであり、やっと実現した分野である。言うまでもなく頭初予想していなかったイメージングプレートの開発に負うところが大きく、重要な役割を演じている。イメージングプレートがこれからも、思いもよらぬ分野で活躍するような予感がする。

耐熱光学素子に関する企画では、自分で自分の首を絞めかねないジレンマから抜け出す模索が、発表された。創造したものが他人の首を絞める場合には、さほど真剣に取り組まないという人間の欠陥は、放射光科学では問題にならないのは幸いである。何れにせよ科学の進歩には欠かせない苦悩である。放射光技術では、ある程度まで克服される日はそう遠くないであろうが、画期的な新鮮

なアイディアの必要を感じた。

放射光科学におけるこれからの夢はなにであろうか？放射光科学を語るとき、多くの人がノーベル賞を意識し口にする。PFを中心とした日本の放射光技術の進歩が生み出した研究の活発さから見ると、そのことが話題に出るのも当然である。また、世界的な規模でみた研究人口の割合からみても、日本人ノーベル賞授賞者の数は極端に少ない。理由は分からないが事実である。だがあまり口にしなくてもよいことではないだろうか。予算を使った事に対する反省あるいは自虐、もしくはそれに対する周りのやっかみから、ノーベル賞が話題になるのならそれはまた話は別である。ノーベル賞は夢とクールな見通しを持つ人に授けられるものである。そのような研究者の夢が叶えられるような体制は夢ではない。

